

様式第2号

視察研修先	岐阜県高山市	氏名	太田陽子
視察研修項目	観光振興について		
感想・所見			
<p>高山市は、飛騨山脈に代表される雄大な自然や江戸時代の面影を残す古い街並、高山祭などの歴史・伝統文化、奥飛騨温泉郷などの温泉、飛騨牛や高冷地野菜などの食、観光資源にあふれていた。</p> <p>古くは戦前、戦後も雑誌の特集記事などで、全国に紹介され、観光地として確固たる魅力を発信してきた。古い街並みや自然など、観光資源は守られ、現在に至っていると思う。</p> <p>1979年頃より、伝統的建造物群保存地区指定など、観光資源の保存などに力を入れてきた。その後、国際観光都市宣言、飛騨高山国際協会の設立など、国際的観光都市を目指してきた。</p> <p>海外向けホームページの開設、バリアフリーのまちづくり、2000年には、飛騨高山国際誘客協議会設立、2007年には、ミシュラン旅行ガイドに飛騨高山が三ツ星で掲載される。</p> <p>インバウンドでの外国人の誘客から、新たな観光誘客の段階に入っているという事だった。</p> <p>インバウンド誘客の取組として、11言語のホームページ、多言語パンフレットを一新、国によって興味や風習の違いによって散策マップなどを作り、情報を発信していた。無料公衆無線LANの整備、観光案内所、誘導案内の多言語化、ムスリム旅行者受入体制の整備、地域通訳案内士の養成、緊急対応コミュニケーションサポーター制度、外国人観光客動態調査の実施（動向把握、受入環境改善）など行ってきた。</p> <p>コロナ禍も、高山への情報をSNSでの発信、動画による情報発信などを行い、訪問のために計画させる取り組み、訪問時にがっかりさせない受入環境整備を行ってきた。そのため、外国人の観光客はコロナ前に戻っている。</p> <p>いろいろな地域との広域連携の取組を行い、北陸・飛騨・信州などさらなる観光誘客を行ってきた。</p> <p>持続可能な地域づくりの実現として、観光を柱にした地域経済から、持続可能な地域づくりのために観光を活かすまち飛騨高山を目的に「観光を活用した持続可能な地域づくり方針」を策定した。</p> <p>地域づくりを支える基盤として、新たな財源として宿泊税を創設した。入湯税とのあり方を検討し、ゴミの収集、上下水道に充てるようにしたという事だった。令和7年10月1日より、宿泊税の導入が開始された。</p> <p>民間のDMOを中心に、地域づくり、市民生活と観光振興の調和を図るための施策</p>			

の具体化など、住んでよし訪れてよしの持続可能な地域づくりに向けての取り組みなど行われていた。

先進的観光誘客の事例を見せていただき、街並みの保存や文化財の保存など、観光資源の豊富さ、寒河江においても、「計画的に行うべきだった」と思いながら、お話を伺ってきた。新しい資源の開拓など、今後の課題であると思った。

様式第2号

視察研修先	岐阜県下呂市	氏名	太田陽子
視察研修項目	下呂市地域公共交通計画について		
<p>感想・所見など</p> <p>下呂市では、2018年度（平成30年度）に下呂市地域公共交通網形成計画を策定し、「いつまでも市民の笑顔がつづく持続可能な公共交通の確保」を将来像として、市民が快適で豊かな生活を送れるよう持続性のある公共交通の構築を目指し、民間路線バス廃線の代替え手段や利用者の利便性向上のため、支線交通をデマンドバス運行へ転換するなど見直しを行い、市民の移動手段の確保を行ってきた。国道41号線、JR高山線にどのようにつないでいくか考えてきた。</p> <p>下呂市第三次総合計画の中、ウェルビーイング、SDGsの目標11「住み続けられるまちづくり」を構成するターゲットの一つとして「すべての人に安全かつ安価で容易に利用できる持続可能な輸送システムへのアクセスを提供する」の目標達成に貢献することが位置付けられている。</p> <p>下呂温泉への観光客数は年間100万人を超えている。インバウンドは17.8%程度で自家用車での観光が60%でJRは20%程度という事だった。</p> <p>自然巡りなど、観光客もデマンドタクシーを予約して利用できるようにしている。その中で、バスの時刻表が分かりづらいなど観光の課題となっていたため、デマンドバスのわかりやすい時刻表やデマンド交通システムの利用でドアツードアも可能になっている。土日の休みが課題になっている。</p> <p>下呂温泉の中で自動運転システムのバス運行を試行している。レベル4まで上がっている。</p> <p>幹線地域周辺に交通空白地があり、市街地周辺部の交通網が課題になっている。加えて乗り換えの解消なども課題と考えている。</p> <p>リニア中央新幹線の中津川駅へのアクセス、観光資源の拡大など今後の課題ということだった。</p> <p>高校生への通学費の援助など行っていた。</p> <p>今後、自動運転バスの運行などの経費軽減などを期待しているという事だった。導入に1億5,000万円かかるという事だった。</p> <p>観光客の誘致については、滞在時間の延長、少人数をターゲットにパッケージの作成、現地ガイドツアー、エコツーリズムなど検討しているという事だった。タクシーの運転手不足については、歩合制の廃止をタクシー会社が行い、英語のガイドなど、特異性を持つことで、若い人材を活用しているという事だった。余談であるが、寒河江駅からタクシーを利用した際、聞き取りを行うと歩合制との事だった。今後の課題と思った。</p>			

自転車による観光なども導入しているという事だった。

周辺地域には、ジャンボタクシーや乗用車型デマンドタクシー乗り合い等で福祉パスポートを提供している。65歳以上年間11,000円、(65歳未満の障がい者) で利用できる。

小型化することにより、フレキシブルに移動が可能になっている。

住民の足の確保は、今後の重要課題であり、ウェルビーイングの実現の一つである。AIによるデマンド型バスなどの導入、市街地周辺の空白地域の活用など今後の課題と思った。

様式第2号

視察研修先	岐阜県土岐市	氏名	太田陽子
視察研修項目	土岐市地域資源活用推進計画について		
感想・所見など			
<p>土岐市は、住民の声で平成の合併はしない道を選んだという事だった。平成7年は65,000人だったが令和7年は55,000人に人口減少が進んでいる。</p> <p>美濃焼が主な産業であり、関係事業社が200社あるという事だった。</p> <p>ふるさと納税も順調という事だった。</p> <p>市域の7割が丘陵で、県立の自然公園もあり、自然豊かで温和な気候が市の魅力である。</p> <p>人口減少と超高齢化により、2060年には、人口が半減するため、転出を抑え、転入を増やす魅力ある地域づくりを行う必要があり、美濃焼の魅力や土岐市の歴史を発信してきた。美濃焼は安土桃山時代より受け継いでいる。</p> <p>JRで名古屋まで40分、アウトレットやイオンモールなどを誘致し、関係人口は増加している。</p> <p>ふるさと納税を増加させ、土岐市を応援してくれる人を増やしていく事を課題としている。令和6年度は6億円、今年はそれ以上を目指しているという事だった。</p> <p>地域資源と観光を統一して一本で考えてきた。振興計画は4つの方針で、その時々の変化に合わせて課題を設定している。満足度を調査し、評価し、計画に反映していく。</p> <p>美濃焼など、オープンファクトリーを開催し、ろくろ体験、ガイド付き窯元めぐり、市内外での出店など行っている。本市で開催している「大陶器展」などへの補助も行っているという事だった。各団体の範ちゅうで、分担や連携でやれることをやっていく、またPR委員会など組合と一緒にやっている。</p> <p>次世代の育成として、地域貢献体験に参加してもらおう。</p> <p>イベント開催時は、移住定住を勧めていくなど、今後委員会の中で議論していくということだった。</p> <p>近隣7市町、広域でPRをしている。中京圏や首都圏など。</p> <p>土岐市の魅力は、資源は何だろうと設問、ヒアリングやワークショップを開催している。公募で一回20人を上限に3回開催している。参加者など、意欲のある方などへ声掛けなども行うが、参加者は満たされているという事だった。</p> <p>7年度のふるさと納税は、6億2000万、返礼品8割が焼き物の実績で、VISIT岐阜県での参加も申し込んでもらい、窯元めぐりをしている。</p> <p>美濃焼は分業制で、土、成形、釉薬など、後継者がいないと閉めてしまうが、現在でも200の事業所が残っている状況。観光協会を中心に、オープンファクトリー</p>			

を開催し、申し込みがあればガイドもつけている。毎週土曜日に開催している。月10件ほど、特別な時間を作ることも行っている。各事業者で自ら体験事業を行っており広がりも出てきている。

美濃焼や戦国時代の山城など、観光資源が多く、それを活用した、めぐりやパンフレットなど魅力的だった。観光で来てみたいと思った。

美濃焼など手に取る機会があったが土岐市につながらなかったが、今後推進事業の拡大で、全国に名を馳せるのでは、と熱意を感じた。民間と行政の関係性など、地域の力の活用、参考にすべき点が多かった。